



「特別の教科 道徳」におけるICT 活用に関する一考察 : 2020 年以降の小学校および中学校の動向に着目して

西口, 啓太

(Citation)

教育科学論集, 29:39-46

(Issue Date)

2026-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100503450>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100503450>



「特別の教科 道徳」における ICT 活用に関する一考察

—2020 年以降の小学校および中学校の動向に着目して—

A Consideration of the Use of ICT in “Moral Education as a Special Subject”: Focusing on Trends in Elementary and Junior High Schools Since 2020

西 口 啓 太

NISHIGUCHI Keita

(関西学院大学・准教授)

キーワード: ICT 活用 use of ICT, 特別の教科 道徳 moral education as a special subject, 道徳教育 moral education, 対話的な学び interactive learning, 生成 AI generative AI

はじめに

急速な教育環境の変化を受けて、学校や教室における情報通信技術 (Information and Communication Technology : ICT) の活用のあり方は、質的な転換が求められている。近年の動向としては、文部科学省が打ち出した GIGA (Global and Innovation Gateway for All) スクール構想により、「多様な子供たちを誰一人取り残すことなく、公正に個別最適化され、資質・能力が一層確実に育成できる教育 ICT 環境を実現する」ことを目指して、児童生徒 1 人 1 台の端末と高速大容量の通信ネットワークをすべての教室に整備することが進められたことがあげられる (文部科学省, 2019)。中央教育審議会 (2021) の答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指してでは、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びを実現するためには、学校教育の基盤的なツールとして ICT は必要不可欠なものである」と述べられている。GIGA スクール構想による 1 人 1 台端末といった政策により、学校教育においてデジタル機器を利用した学習が着実に定着してきている。その一方で、ICT の効果的な活用は、学校教育において喫緊の課題となっていることがわかる。

教育におけるデジタル機器の活用への視点が重要視されるなかで、ゲーミフィケーションによるゲーム要素を取り入れた技術の活用も検討されるようになってきている。藤本 (2024) は、教育や社会課題に対する手法として、ゲーミフィケーションが注目され、人々の社会的な行動変容を促すものとして実践が進んだと述べている。さらに、その手法は個別学習の仕組みとして普及し、オンライン学習プラットフォームの「カーンアカデミー」や語学学習アプリの「Duolingo」、クイズ学習アプリの「Kahoot!」が、教育にゲーミフィケーションを導入した事例として世界的に広まった点に言及している。このように、「Duolingo」や「Kahoot!」などのクイズ形式の応答システムである Game-based Student Response System (GSRS) が教育実践のなかでも注目を集めるようになってきている。たとえば、鳴戸・鳴海 (2025) は、中学校 3 年生を対

象に、英語教育における Kahoot! を用いた語彙学習を実施した。クイズ形式のゲーム性は、競い合いながら学ぶ楽しさを感じさせるため、生徒のモチベーションを高く維持しながら語彙力を向上させるという学習効果があると述べている。この実践事例からは、各教科の特性に応じてゲーム要素を取り入れるなど、ICT を活用しながら、児童生徒の興味関心や学びに向かう姿勢に働きかける仕掛けといった工夫も試みられていることがうかがえる。

このように、児童生徒の学びの質的向上を目指して ICT の活用が急速に進み、その活用のあり方をめぐる議論は加速しているが、2020 年以前の小学校や中学校の各教科では、ICT がどのように活用されていたのか、その実態を明らかにする取り組みもおこなわれている。高橋・高山・山西 (2021) は、黎明期である 2010 年代初頭における小学校での 1 人 1 台の情報端末活用に関する文献調査をおこない、その特徴について検討を試みている。その結果、児童によって PC が活用された教科は、社会 (26 件) が最も多く、続いて国語 (21 件)、算数 (19 件)、理科 (13 件)、音楽 (7 件)、総合的な学習の時間 (7 件)、生活 (5 件)、体育 (5 件)、外国語 (5 件)、特別活動 (5 件)、図画工作 (3 件)、道徳 (2 件) であったと述べている。教員の ICT 機器の活用方法としては電子掲示板の活用があり、それは主に自作教材やデジタル教科書の拡大提示が多くみられたという。また、PC のような情報端末に関しては、児童への資料の配布や児童の情報端末にある資料を電子黒板に転送する際に活用されていたという。

さらに、全国から無作為に抽出した中学校 500 校において 5000 名の教員 (有効回答 1160 名) を対象に、各教科の授業における ICT 活用の状況を調査した森山・圓井・世良・黒田・小倉 (2018) がある。同調査の結果によると、技術 (98.8%)、理科 (89.9%)、美術 (86.4%) では ICT 活用率が有意に大きく、国語 (63.3%)、数学 (58.3%) では ICT 活用率が有意に小さいことが明らかになっている。加えて、同調査で得られた結果から確認できる範囲では、生徒が情報を収集したり、選択したりする活動への着目度の低さが要因のひとつとなり、「協働学習の場面」や「個別学習の場面」での ICT の活用率

は極めて低い状態にあることから、学習指導要領の改訂に伴って求められているアクティブラーニングとの結びつきは十分とはいえないことが指摘されている。

これらの実態調査から、GIGA スクール構想以前の学校教育では、電子黒板への教材や資料の提示・転送といった一斉指導場面における教師主体の ICT 活用がおこなわれていた状況がうかがえる。高橋ら（2021）が、「PC は学習過程の各段階における学習の質の向上に寄与することができる道具と考えの方が、より適切ではないか」と指摘するように、GIGA スクール構想と新型コロナウイルスによる教育環境の変化を受けて、2020 年以降の学校教育における ICT 活用は、教師主体の単なる「機器の導入」から、児童生徒主体の「学びの質的転換」を志向する活用へとそのあり方を変化させる必要があることが示されているといえる。

また、GIGA スクール構想以前の ICT 活用の実態を明らかにしようとする試みからは、小学校段階では、PC といった情報端末が、教科化する以前の領域であった道徳で活用されにくい状況にあったことがうかがえる。一方で、中学校段階では、主要教科に関する動向は示されているものの、小学校とは異なり、道徳についてはその実態は明らかにされていない。道徳は、2015 年の学習指導要領一部改正により、「特別の教科 道徳」として新たに教科として位置づけられ、小学校では 2018 年、中学校では 2019 年から全面实施された。山本（2020）は、新型コロナウイルスの感染拡大とその対策のなかで、新たに教科化した「特別の教科 道徳」で ICT を活用した方法の開発と実践を模索する動きがあらわれたという。たとえば、文部科学省が公開しているウェブサイト「道徳教育アーカイブ」において、「特別の教科 道徳」向けの授業映像やデジタル教材が掲載されていることを取り上げ、道徳教育における ICT の活用に対する期待が高まっている状況にあることが述べられている。鈴木（2022）も、「これまでは映像や BGM 等を資料として提示するなど、教師主導の活用が多勢を占めていたが、ここ数年で 1 人 1 台端末を活用しながら子供たちが主体となって学習を進めていく事例」も確認されるようになったという。

以上のように、GIGA スクール構想と新型コロナウイルスによる教育環境の急激な変化を受けて、学校教育において ICT を活用することは喫緊の課題となった。そこでは、機器の導入といった単純な活用ではなく、児童生徒の学びの質的な変容を促す活用が求められている。このような点を踏まえると、新たに「特別の教科 道徳」として教科化された道徳科においても、ICT の効果的な活用やその検討が進んでいることが想定される。そのため、児童生徒の道徳性を養う教科として中核を担う「特別の教科 道徳」の授業において、ICT の活用はどのように展開されているのかを明らかにすることは、個別最適な学びと協働的な学びを通じて、これからの社会を担う子供たちに求められる資質・能力を育むための方法を検討するうえで重要になると思われる。

そこで本稿では、小学校と中学校の「特別の教科 道徳」

における ICT 活用の展開とその特徴について、2020 年以降の動向に着目して検討することを目的とする。ここでは、「特別の教科 道徳」における ICT 活用の展開の様相を明らかにするために、主に文献調査により、ICT 活用の特徴と傾向について考察を試みる。以下では、まず児童生徒の視点から、道徳科における ICT 活用の特徴を探る。次に、教師の視点から、道徳科における ICT 活用の特徴を検討する。さらに、近年著しい発展をみせる生成 AI に着目し、児童生徒および教師の両視点から、その利活用の特徴を確認する。

1. 交流による他者視点の獲得と思考の深化

まず、児童生徒の視点から、「特別の教科 道徳」における ICT 活用の特徴を検討する。

ICT を活用して他者と交流するなかで、児童生徒が自身の考えや意見を表現したり、発信したりすることは、子供たちの思考を深化させることにつながる点が、道徳科の実践における特徴のひとつであるといえる。青木・奥住・小林（2024）は、9 編の論考を基に、2015 年以降の道徳科における ICT 活用に関する研究動向、なかでも「導入」「展開」「終末」の学習指導過程ごとに、各段階に応じた ICT 活用の実践研究を整理している。ICT の活用が充実するなかで、「表現」や「制作」に関する実践が多くみられることに加えて、他者と交流・共有することで考えを広げたり、深めたりする際に、ICT の活用が有効であることを述べている。表現や制作といった活動において、他者との交流や意見交換など考えを共有することが思考を深化させる機会となる可能性を示唆している。

このような ICT 活用の有効性は、主に小学校の実践のなかで確認することができる。たとえば、石原（2020）は、小学校 2 年生の道徳の授業において、動画紙芝居の活用が、児童生徒に与える効果について検証している。ヒアリングの結果によると、8 割以上の児童が肯定的な回答をしており、「ICT 活用により、話し合いがしやすく、他者との関わりを通じた新たな気づきを得て、考えを深めているなど、学びが活性化している」という。また、他者が大型ディスプレイを使用して説明することで、書き手の考えや思いをより理解しやすくなるといった点も ICT 活用の利点としてあげている。動画紙芝居といったメディアの活用による児童同士の交流を通じて他者の視点に触れることが、児童に気づきを与えることで、思考や学びを深めていることがわかる。

また、湊本・田中（2023）は、小学校 3 年生および 6 年生の道徳の授業において、タブレット PC を活用し、ロイロノートを用いた共有やふりかえり活動に役立てる仕掛けづくりをしている。また、テキストマイニングにより、全員の意見を即時に可視化して共有できる Web サービスを利用し、中心発問に対する各児童の答えを収集し、モニターで全体に共有する活動をおこなっている。この活動では、友達が見つけた答えと、自分が見つけた答えを照らし合わせながら、再度自分のなかで問い直しがおこなわれることが目指されている。

同実践からは、情報が全体に共有される機能の活用が、自己と他者の意見を交流させる仕掛けとして機能し、自己の内省を促していることがうかがえる。

塩家（2023）は、小学校4年生を対象に、情報端末を活用した道徳の授業を実践し、その効果を検証している。似顔絵交流という活動を実施した授業では、情報端末を活用した成果として、「一つの場面でも児童たちは、似顔絵を描くことにより、想像する力が働き、その場面や主人公の心情理解のイメージを明確にすることができた」ことや「似顔絵交流を通して、他児童の考えを知ることができ、そこから共感や疑問が生まれたり、自分にはなかった新たな考えの発見ができた」ことをあげている。文字による表現とは異なる似顔絵交流という児童が自身の考えやイメージを視覚的に伝える制作活動も、他者の考えに触れ、新たな視点を獲得することに寄与している点が読み取れる。

このように、ICT の活用により、他者と交流する活動を通して文字やイメージを視覚化することで、児童生徒の考えや意見が他者に向けて表出され、それが互いの刺激となって子供たちの思考を深化させていることが、道徳科における実践からうかがえる。以下では、このような道徳科における ICT 活用の特徴を、(1)情報の可視化と即時的な共有による自己表現の支援、(2)自己表現に伴う心理的負担の軽減、(3)技能面の補完、(4)興味関心の喚起、(5)支援を必要とする児童生徒への配慮に分けて述べる。

(1) 情報の可視化と即時的な共有による自己表現の支援

交流や共有の機能は、情報の可視化やその即時性により、児童生徒の考えや経験を迅速かつ多角的に収集することを可能にする。片山（2021）は、ICT の活用により、個々人の学習履歴を記録できる点に加えて、意見を発表する生徒に限られていたこれまでの状況に対して、生徒一人ひとりの考えを互いにリアルタイムで共有できるようになり、生徒同士の双方向での意見交換が可能になる点や、即時的な共有により多様な意見に触れる機会の増加が期待される点について述べている。

また、幸阪（2021）は、小学校第2学年の児童を対象にした授業において、AI テキストマイニングを活用し、児童の意見に含まれる言葉のつながりや頻度を可視化することで、問題意識の傾向を顕在化する実践をおこなった。そこでは、ワードクラウドに出現する仲間の書いた言葉に対して、児童は関心を高めるとともに、その言葉と他の言葉のつながりを意識しながら、問題解決の手段として活かすことができたことを取り上げている。また、ICT の活用を通じて、少数意見に含まれる言葉の可視化により問題意識を引き出したり、情報の共有により自己表現の多様性を高めたり、自己のふりかえりを深化させることができた点に触れながら、児童の思考やコミュニケーションを促すためのものとして ICT 活用を位置づけている。このように、共有や交流活動が思考を深化させるのは、児童生徒一人ひとりの考えを即座に共有できる同時双方向性や、視覚的に情報を把握できるようにする機能性に

より、教室全体で多様な意見に触れることを可能にするためであると考えられる。

ただし、交流・共有をおこなう際には留意しなければならない点もある。たとえば、「共有されることが前提になると本音を書きにくい」や「テキストに打ったり書いたりして共有するより、直接話し合った方がにぎやかで楽しい」という共有機能に対する否定的な意見がある（鈴木、2022）。鈴木（2022）は、このような課題を踏まえて、協働で作業をしたり、編集をおこなったりする活動や多様な意見を共有しながら合意形成を図る活動のように、自分と異なる見方や考え方に会えるように工夫することや、共有ノート機能を用いるなど互いの意見を比較、分類、関連づけることでよりよい考えを創出するといった協働的な学びを充実させることの重要性を指摘している。つまり、ICT を用いて交流や共有をする際は、児童生徒が主体的に議論に参加し、価値を創造するために、教師からの働きかけが必要であるといえる。

(2) 自己表現に伴う心理的負担の軽減

ここでは、児童生徒の自己表現の際に生じ得る心理的負担を軽減するという視点から、道徳科における ICT の活用の特徴を検討する。

荒川・梶井（2022）は、対話活動における課題として、特定の児童の一方向的な発言で対話が収束してしまう場合が少なくない点を取り上げ、思考を深める対話に至らない現状があることを指摘している。そのうえで、道徳科における ICT 活用は、「恥ずかしさ」や「劣等感」から生じる対話の困難感や課題を改善し、児童の自己内対話を促す手段となる可能性があるという。ここから、教室内での児童生徒同士の対話を有益なものとするには、恥ずかしさや劣等感といった対話を困難にする心理的負担を低減させる必要があることがわかる。また、ICT の活用は、そうした心理的抵抗感を緩和するものとして期待されていることもうかがえる。

平山（2023）は、小学校4年生の道徳科の授業において ICT を活用して個人の意見を共有する授業展開の効果について検討している。具体的には、実名で経験を ICT で共有するクラス、匿名で経験を ICT で共有するクラス、ICT を用いずに実名で経験を発表して共有するクラスの3群に分けて効果を検証している。その結果として、①発言に意欲的でない児童の意見を収集し、共有することができたこと、②匿名による経験の投稿がノート画像での共有よりも多くの意見が集まる可能性があること、をあげている。①については、手をあげて発言をするといった方法では自身の経験や意見を出さない、あるいは出せないような児童が、クラス全体に対して自らの経験を伝えることができたのは、ICT の活用による効果であるという。また、②については、匿名による心理的な手軽さや、何度も情報を送信することができるという機能の面で、意欲的な児童がより多く投稿することが可能になったことの効果であるとされる。このような匿名機能の活用は、学習活動への参加の敷居を下げることにつながっていることがわかる。

さらに、塩家（2023）は、ICTを活用した授業実践の成果として、「全体で発表することに抵抗を感じている児童にとっては、自身のタブレット端末上に考えを入力するだけで考えの発信ができることで、自分の考えを発信する場面が発言する場面以外にも確保され、学級全体での交流に参加できたこと」をあげており、容易にクラス全体に自身の考えを発信、伝達できることは、授業参加への意欲に繋がる可能性がある点に言及している。このように、ICTを活用することで、児童生徒は多様な表現手段を用いることができるため、自己の考えを表現するという認知的負担のある活動への心理的抵抗感を和らげ、考え、議論するという学習活動への参加を促進する可能性があることが示唆されている。

また、鈴木（2022）は、小学校高学年の児童を対象に、道徳の授業における情報端末の活用の有効性について調査を実施している。「教師が提示する資料等が個人の端末に共有されることや、各自の提出した回答が全体に共有されること」に対する肯定的な意見があることに加えて、授業では、自ら手をあげて発表した児童の意見を中心に進められることが多かったが、回答を全体に共有する機能により、「発言が控えめな児童にもスポットが当たり、そこから新たな意見や友達の意外な一面を発見できる点」に高い有用性を感じているという。このように、特定の児童生徒の発言や意見が取り上げられるのではなく、自己表現することに抵抗感があつたり、控えめな性格のために自ら発言することを躊躇ってしまったりする児童生徒の意見や考えに焦点を当てることで、ICTを活用することで実行しやすくなる。より多くの児童生徒が教室内の議論に参加し、少数意見も含めた他者との交流を通じて多角的な他者の視点を取り込むことにつながる点も特徴であるといえる。

（3）技能面の補完

先述した似顔絵交流を取り入れた授業を実践した塩家（2023）は、半構造化インタビューにより、情報端末の使用が、どのようなときに有効に働くのかについて明らかにしている。具体的には、「キーボード入力ができることで筆記用具を使って書いたり消したりする手間が省ける」や「分からない漢字を調べる手間が省ける」「手書きより打ち込む方が早い」のように、学習内容ではなく、学習作業面で容易になったことや文字の見やすさといった点で、文字入力時の情報端末の活用が有用であると感じている児童が多いことが確認されたという。また、共有機能による考えの視覚化は、「発表しなくてもよくなった」や「発表を聞かなくても友達の考えを見て分かるようになった」「友達の考えを見られることがよい」「友達の考えに評価ができたり、コメントを送ったりできるのがよい」など、共有機能を用いた交流に対する好意的な回答が多くみられたと述べられている。高橋・車塚・長谷川・中井（2023）でも、児童生徒がデジタル形式を支持している理由の多くは「文字入力の便利さ」に加えて、「いつでもどこでも自由に見ることができる」点をあげているという。このように、キーボードによる文字入力のような学習作業といっ

た児童生徒によっては差が生じる可能性がある技能面を補うことを可能にするという点で、ICT機器を活用することは児童生徒から肯定的に受け取られていることがわかる。

また、塩家（2023）では、情報端末を活用した成果として、「主人公の心情について言葉で考えをまとめることが難しい、支援が必要な児童にとっては、似顔絵を描くことは文章表現に比べてとても簡単に取り組むことができ、またそれを通して全体交流にも参加することができた」ことがあげられている。文字による表現が得意な児童生徒もいれば、絵などのイメージで表現することが得意な児童生徒もいる。児童生徒の能力や特性に応じて、表現や発信の方法を子どもたちが自身で選択できるようにすることは、ICTを活用することで実現しやすくなる可能性がある。何を用いて表現するかという方法を重視するよりは、教室での学びに主体的に参加できるように、技能面を補ってくれる選択肢のひとつとしてICTの活用を検討することも重要になるといえる。

（4）興味関心の喚起

技能面を補完することにとどまらず、ICTの活用には、児童生徒の情意面に働きかけることも含まれる。具体的には、児童生徒の興味関心を喚起する点があげられる。

森（2025）は、小学校道徳科の教科書を分析し、児童に対して学び方がどのように示されているかを検討している。たとえば、教科書の「目次には、二次元コードを配置し、教材を補完する動画やスライドショー等による資料、ワークシートや学び方に関する動画資料があること」を示しており、「教材に関する情報が豊富にあり、児童の興味・関心を高める工夫が随所に見られる」と述べている。また、学び方のガイドが示されており、授業の流れを「考えよう・深めよう・つなげよう」等のキーワードで示すことで、児童生徒が見通しを持てるようにしている点や、イラストや動画等で話し合いの方法をわかりやすく説明している点を取り上げ、学び方のガイドが児童生徒の自主的な学習を支える役割を担っているという。これらの点から、情報端末の特性を活かして、参考となる情報へのアクセスを容易にしたり、学び方が例示されたりすることで、自発的な学びを促すものになることが示唆されている。

また、片山（2021）は、中学校3年生を対象とした道徳の公開授業において、ICT活用としてデジタル教科書を用いる効果について検討している。公開授業への参観者による協議では、「視覚的支援が随所に見られ、生徒にとっても今何をしているのかが分かりやすい」「テレビ画面に発問を表示することで、何を考えるべきかが分かりやすい」「アンケート結果と諸外国のものと比較することで、関心を高めることにつながっている」といった意見があがっている。これらの意見から、口頭での指示だけでは、十分に教師側の意図や指示が伝達されないことも想定されるが、ICTにより視覚的に伝達することで、児童生徒がある程度自身のペースにあわせて活動に参加したり、学習内容を自身に引きつけて考えたりしやすくなっていることがうかがえる。さらに、このような興味関心の

喚起といった側面に加えて、すべての児童生徒が着実に学べるよう、個別最適な学びにつながる配慮や支援としての働きがあることも読み取れる。

（５）支援を必要とする児童生徒への配慮

ICT の活用は、すべての児童生徒への配慮として機能する側面があると考えられるが、なかでも発達障害を有するなど、特別な支援を必要とする児童生徒に対する配慮の手段として期待されている側面もある。

青木（2023）は、発達障害を有する児童に対して道徳科でおこなわれている配慮・支援について検討している。そこでは、「ICT 機器を使用することは、集中することや継続的な行動をコントロールすることの困難さのある児童であっても、『考え、議論する』道徳への参加を促すとともに、道徳的価値について考えるきっかけになる」可能性があると述べている。また、発達障害を有する児童への配慮・支援として、ICT を活用している教員は 40 名中 7 名と少数であったが、7 名中 6 名が「不注意によるうっかりミスをすることがある」児童に対する配慮・支援として ICT を活用していることを注目すべき点としてあげている。発達障害がある児童生徒だけではなく、気分の浮き沈みや体調の変化により、持続的に集中することが難しかったり、不注意によって、学習活動にうまく参加できなかったりすることは、すべての児童生徒に起こりえるものであるといえる。支援を必要とする児童生徒への配慮に限定されない、個別最適な学習や協働的な学習につながる支援方策として捉える視点も重要であると思われる。

以上のように、ICT を活用することは、交流や共有を通じて他者の視点を獲得し、自身の思考を深化、洗練させるものとなる。また、自分の考えを言葉やイメージにして伝達することや、人前で話すことに困難や躊躇いを感じる児童生徒の自己表現を支える手段となり得ることがわかる。ただし、塩家（2023）が述べるように、「端末を使用したからといって、それだけでは『深い学び』には直接つながらない。考えの共有機能で集めた児童の情報を教師が授業で生かしていくこと」が重要である。さらに、児童生徒から収集した意見を教師が有効活用することによって、道徳科における対話の質的向上および量的確保の両面が期待できる（塩家、2023）というように、教師の視点から ICT の活用のあり方を検討することも重要であることがわかる。

2. 作業負担の緩和と授業づくりの支援

次に、教師の視点から、道徳科における ICT 活用の特徴を検討する。ここでは、(1)デジタル化による教師の作業負担の軽減、(2)児童生徒の反応の把握と柔軟な対応に分けて述べる。

（１）デジタル化による教師の作業負担の軽減

ICT を活用することは、教師の作業的な負担を軽減する可能性を有している。

高橋・車塚・長谷川・中井（2023）は、Google スプレッドシートで作成した評価資料であるリフレクション用の往還型

OPP（One Page Portfolio）シートの効果として、①評価をつける際の効率化、②生徒の意見を掲載している学級通信の作成の時間短縮をあげている。たとえば、授業のまとめとして記入させた生徒の意見を学級通信に掲載してリフレクションの際に参照させる場合、デジタル化は教師の負担を軽減させることや、さまざまな思考ツールを例示する際など、生徒に多くの資料を提示する場合、プリントで配布すると準備や管理の面で負担が増大してしまうため、Chromebook などの生徒端末で自由に閲覧できる状態にすることで、提示が容易になることに加えて、一度提示すれば次回以降も参照しやすくなる点で効果的であると述べている。ここでは、独自開発した評価シートを事例に取り上げ、クラウドベースで利用できる資料を作成することが、教員による児童生徒の評価活動を効率的なものへと変える意義が示されている。さらに、資料や情報を児童生徒が参照可能な状態にするために、デジタル化することは、準備や管理業務の削減だけではなく、繰り返し使用可能なものとなることから、教師の作業コストを削減するという有用性があることがわかる。

ただし、「ICT を活用することでプリント形式に比べて多くの資料を提示しやすい分、生徒にとって情報過多になってしまう側面があること」には注意が必要であると指摘している（高橋・車塚・長谷川・中井、2023）。このように、デジタル化は、教師の作業負担を軽減する効果がある一方で、その提供のしやすさから、必要以上に情報を与えてしまうことで混乱を招く恐れがあるといった点には留意する必要がある。

（２）児童生徒の反応の把握と柔軟な対応

ICT の活用には、授業において児童生徒の様子や反応を把握しやすくするためのツールとしての側面もある。

石原（2020）は、動画紙芝居の実践における発話記録から、教師が児童と一緒に動画を見ることで、子どもの表情の変化がどの場面で生じるのかを知ることができるため、ICT を使用していないときと比べて、思考を深めるタイミングで教師から発問がおこなわれるといった点が読み取れると述べている。ここから、動画教材などを提示した授業において、一人ひとりの児童生徒が教材に対して、どのように反応し、どのような理解を示しているかを教師が観察し、把握するための時間的な余白の提供が、ICT の活用によっておこなわれやすくなることがわかる。

また、動画教材以外にも、デジタル教科書やデジタル化された史資料の利活用により、児童生徒の状態が把握しやすくなる。片山（2021）は、学習者用デジタル教科書の登場により、学習者である生徒一人ひとりが個々の端末で教材が利用でき、紙面の拡大や書き込みなど、ICT 教材ならではの機能が活用できるようになることで、教師は授業中に生徒一人ひとりの反応を把握することができるようになり、双方向型の一斉授業が可能になる点に言及している。

このように、ICT の活用は、授業前後での教師の作業負担を軽減するものとして、機能するだけではなく、授業内での指導過程において、一人ひとりの児童生徒の学びの状態や反

応を観察し把握することを可能にし、一方的な授業ではなく、双方向性のある授業づくりにつながる可能性があることが読み取れる。

3. 道徳科における生成AIの活用

ここでは、近年発展をみせる生成AIに着目し、児童生徒および教師の両視点から、その利活用の特徴を考察する。

(1) 児童生徒の視点からみる生成AIによる学習支援

児童生徒の視点から生成AIの活用を捉えると、情報処理という機能面での特徴を活かした学習の円滑化があげられる。たとえば、高橋・車塚・長谷川・中井(2023)は、AIを使用して生徒の意見を収集し可視化する双方向型協働学習支援ツールであるAIAI モンキーを利用した中学校の道徳の授業について検討している。主に授業の導入場面や展開場面で、他者と意見交換をおこなう際に、AIAI モンキーといったICTを活用することで、即時的かつ視覚的に生徒全員の考えを共有でき、多様な考えに触れる機会となることに加えて、匿名の機能を用いることで生徒の本音を引き出しやすくなるという効果がある点を含めて、ICTの活用が道徳的な価値に迫るうえで有効であったと述べている。このように、生成AIを活用することは、短時間での情報処理と情報提示により、円滑な意見交換を可能にするといえる。さらに、生成AIの機能を活用した教室全体での交流や共有では、匿名性という性質を付与するといった工夫も施せるため、多角的な意見や考えの収集にとどまらず、児童生徒の本音を引き出すことができ、深い学びにつながる可能性があることを示唆している。

道徳性を養う教科という点を踏まえても、道徳の授業では、教師の求める答えを意識して児童生徒が本音を語れない状況が生じる恐れは常に存在している。このような本音を発信しにくいという状況は、「考え、議論する道徳」を目指す道徳科において、児童生徒の学びを阻害する可能性もある。児童生徒の本音を引き出し、教室内での交流や共有をより有益なものとするためには、ICTや生成AIを適切に活用することで、児童生徒が自身の考えや意見を表現することや発信することへの抵抗感を減らす仕掛けづくりをすることが重要であると思われる。

また、樋井・山崎(2024)は、知的障害特別支援学校中学校部の道徳の授業において、生成AIの回答を生徒自身が評価する活動を行うことで、生成AIによる回答を絶対視することなく、必要に応じて考えを取り入れたり、考えの違いから学んだり、自身の考えを深めるための参考にする姿が確認されたことを報告している。そのような生徒の姿は、自分とは異なる意見を尊重し、自分の考えを深めることを示していると述べている。さらに、生成AIの回答に納得できない場合には、追加の質問を繰り返したり、回答が難解な場合には、生徒同士で協議してわかりやすい回答を得るための命令文を考案したりする活動を通じて、判断能力が向上し、生成AIに対する理解の深まりがうかがえたという。ここから、生成AIとの対

話においては、生徒自身が納得、理解が十分な状態に達するまで、試行錯誤を繰り返しながら何度でも挑戦できることがわかる。つまり、生成AIの活用は、人との対話において制約となる時間的、空間的な課題を部分的に解消し、学びを円滑なものにする可能性を有するといえる。この事例では、知的障害のある生徒による生成AIを活用した学びの様相が示されているが、これは特別な支援を有する子供に限定されるものではなく、すべての児童生徒にも当てはめることができると考えられる。

(2) 教師の視点からみる生成AIによる業務支援

教師の視点から捉えると、生成AIの活用は、よりよい授業づくりに必要な教材研究の時間を効率化することに寄与するものとなり得る。

作田・松下(2024)は、教員の多忙化を解消するための方策として、小学校および中学校の道徳科における教材研究に生成AIを活用した効果を検証している。ここでは、生成AIの活用は、(1)教材研究における時間を大幅に短縮したこと、(2)教科書や指導書等でおこなう教材研究では実施がしにくい問い返しをおこなえること、(3)生成AIへの問い返しにより、実際の授業をしている感覚に近い状態で教材研究がおこなえるため、児童生徒に発問した際の反応が想定しやすくなることが成果としてあげられている。生成AIを活用することで、児童生徒がどのような意見を述べようとするのか予測が立てやすくなるため、実際の授業時に突発的に意見が出された場合にも柔軟に対応することができることを教材研究に寄与する点として示している。ここから、初等教育段階や中等教育段階のいずれにおいても、生成AIを活用した教材研究は、問い返しといった対話的な活動により、教師の授業づくりを支援する可能性を有していることがわかる。この問い返しによる生成AIとの対話は、授業時に生じる可能性のある児童生徒との対話を予測するひとつの指標となったり、教師による働きかけがうまく働くかどうかを確認する機会にもなったりすると思われる。このように、より現実的な状況を想定した授業準備をおこないやすいという点で、生成AIの活用は教材研究や授業づくりの効率化につながるといえる。

教師が担う職責から生じる業務の多様性とそこから生じる多忙化により、児童生徒の学びを支える授業づくりに支障をきたしている状況があるなかで、上述のように、教師のよりよい授業づくりを支援するための手立てとして、生成AIといった現代的なツールの活用のあり方を探ることは重要となってくると考えられる。

おわりに

本研究は、GIGA スクール構想や新型コロナウイルスによって教育ICT環境が急速に変化するなかで、学校教育、なかでも新たに教科化された「特別の教科 道徳」に焦点を当てて、ICT活用の特徴と傾向を整理することで、2020年以降の展開の動向について検討を試みた。具体的には、児童生徒の

視点、教師の視点、生成 AI の活用の視点から、道徳科における ICT 活用の特徴を把握することを試みた。

まず、道徳科における ICT 活用に関して、児童生徒の視点からは、情報の可視化と即時的な共有による自己表現の支援、自己表現に伴う心理的負担の軽減、技能面の補完、興味関心の喚起、支援を必要とする児童生徒への配慮という特徴が抽出された。これらの特徴から、教室内での交流や共有による他者視点の獲得と思考の深化という児童生徒の深い学びに ICT の活用が寄与する可能性が示唆された。ただし、形式的な交流による、協働的な学びの形骸化という恐れがあるため、主体的な学びにつなげる教師による働きかけの視点も必要である。次に、教師の視点からは、デジタル化による教師の作業負担の軽減および児童生徒の反応の把握と柔軟な対応という特徴が確認された。これらの点からは、教師の作業的な負担感を緩和することだけではなく、教室のなかで展開される実際の授業や授業づくりを支え、児童生徒の学びを深めることにつながることが考察された。最後に、生成 AI の活用に関しては、児童生徒の視点と教師の視点から、情報処理と情報提示という機能面の特徴を活かした学習支援と、よりよい授業づくりに必要となる教材研究における時間の効率化の支援という特徴がみられた。ここから、生成 AI のような現代的なツールの活用は、児童生徒の深い学びを支援する可能性を部分的に有しているだけではなく、日本の教師が置かれている職務の多様化と多忙化による授業づくりを支える手立てとなり得ることが示された。ただし、表面的な学びや学習活動の形骸化を招く恐れもあるため、ICT や生成 AI をどの程度活用するのかについては、慎重に検討を進める必要もあるといえる。

以上のように、本稿では、「特別の教科 道徳」という道徳科を取り上げて検討した。そのため、他教科における ICT 活用の実態やその特徴を比較するという視点では検討がおこなわれていない。したがって、今後は、他教科における ICT 活用の実態や動向との比較を通じて、道徳科における特有の ICT 活用のあり方や、教科横断的に活用可能な視点を探ることが課題としてあげられる。

参考文献

荒川怜奈・梶井芳明 (2022) 『「特別の教科 道徳」における対話と ICT 活用に関する研究の今後の展望』『東京学芸大学紀要 総合教育科学系』 73, 109-118.

青木利樹 (2023) 「小学校道徳科における発達障害を有する児童への配慮・支援の実態—文部科学省『報告』を用いて—」『道徳と教育』 342, 51-61.

青木利樹・奥住秀之・小林巖 (2024) 『「特別の教科 道徳」における ICT 活用に関する研究動向—特別支援教育の視点を踏まえて—』『東京学芸大学紀要 機構』 75, 53-58.

中央教育審議会 (2021) 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して—全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現— (答申)」

(https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto_02-000012321_2-4.pdf) (2026 年 2 月 1 日確認)

藤本徹 (2024) 「ゲーム学習研究の動向と今後の課題」『コンピュータ&エデュケーション』 56, 12-17.

樋井一宏・山崎智仁 (2024) 「知的障害特別支援学校中学部における生成 AI の理解と学びへの活用に関する教育実践」『日本教育工学会論文誌』 48(Suppl.), 61-64.

平山靖 (2023) 「道徳的価値に関する経験を想起して共有する方法—ロイロノート・Google Workspace for Education を用いた実践の一考察—」『コンピュータ&エデュケーション』 55, 50-55.

石原義行 (2020) 「教育の情報化 ICT 活用指導力の向上を目指して—小学 2 年生道徳科の授業を通して—」『教育実践方法学研究』 5(1), 83-94.

片山健治 (2021) 「Society5.0 時代の公教育 (学校 ver.3.0) として求められる道徳授業のあり方—問題解決型の道徳授業における実践事例の提案—」『道徳と教育』 339, 61-70.

幸阪創平 (2021) 「道徳科の主体的・対話的で深い学びを促す ICT の活用とその学習効果に関する一考察」『道徳と教育』 339, 71-83.

鳴戸宏太・鳴海智之 (2025) 「中学 3 年生を対象とした Kahoot! を用いた英語の語彙・表現の学習効果」『コンピュータ&エデュケーション』 58, 82-87.

湊本祐也・田中千映 (2023) 『「探究」の姿を引き出す道徳科におけるしかけ—自己の生き方について考えを深めていこうとする姿をめざして—』『和歌山大学教育学部附属小学校紀要』 45, 104-113.

文部科学省 (2019) 「GIGA スクール構想の実現へ」(https://www.mext.go.jp/content/20200625-mxt_syoto_01-000003278_1.pdf) (2026 年 2 月 1 日確認)

森美香 (2025) 「道徳科の新しい教科書の特徴とその活用」『千葉大学教育実践研究』 28, 93-99.

森山潤・圓井健史・世良啓太・黒田昌克・小倉光明 (2018) 「中学校の授業における ICT 活用の状況と教科間の差異」『兵庫教育大学研究紀要』 53, 109-116.

作田澄泰・松下恭平 (2024) 「生成 AI を活用した道徳科における教材研究の在り方」『九州女子大学紀要』 60(2), 195-207.

塩家崇生 (2023) 「道徳科授業における一人一台端末活用の学習効果についての一考察—端末導入時期における児童実態調査の結果から—」『道徳教育方法研究』 (28), 31-40.

鈴木賢一 (2022) 「共有のその先—1 人 1 台端末を活用して主体的・対話的で深い学びの実現を目指すために—」『道徳と教育』 340, 87-97.

高橋純・高山裕之・山西潤一 (2021) 「黎明期における小学校での児童 1 人 1 台 PC 活用の特徴—2010 年代初頭における事例から—」『教育情報研究』 36(3), 3-14.

高橋晶・車塚祐太・長谷川正裕・中井康平 (2023) 「ICT を活用した道徳授業の実践—導入・展開・振り返りの各場

面に着目して一」『千葉大学教育学部附属中学校研究紀要』53, 37-42.

山本和行 (2020) 「道徳の指導における ICT の活用—『特別の教科 道徳』の教科上の特徴を踏まえて—」『天理大学教職教育研究』3, 21-27.